

## 趣旨説明：いま構築されるアジアのジェンダー

落合恵美子

京都大学

本書は、「いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成 (Asian Gender under Construction: Global Reconfiguration of Human Reproduction)」というタイトルで、2009年1月8～10日に開催されたシンポジウムの記録です。このシンポジウムは、国際日本文化研究センターで2年間続けてきた共同研究会「アジアにおける家族とジェンダーの変容：近代化とグローバル化の時代に (Family and Gender Changes in Asia in the Era of Modernization and Globalization)」の締めくくりとして開催されました。

この共同研究会に集いましたメンバーの半分ほどは、2001年から2003年まで、「アジア諸社会におけるジェンダーの比較研究 (A Comparative Study on Gender in Asian Societies)」という調査研究プロジェクトに参加して以来の、長年の研究仲間です。このプロジェクトでは、急速な経済発展を遂げたアジアにおいて、家族やジェンダーはどのような変容を遂げつつあるのかということを中心に、中国、韓国、台湾、タイ、シンガポールの5地域でフィールド調査を実施しました。その結果分かったのは、一口に「アジアのジェンダー」と言っても、現状のジェンダーのあり方は地域によって多様であること、しかしその一方で共通の方向への変化のトレンドも見いだせること、という2点でした。

復習のためにアジアのいくつかの社会における女性の働き方を示した図1を見ておきましょう。後のセッションで議論にもなるでしょうが、どのような活動を労働とみなすかは、それだけで大問題であり、特に女性の労働は過少登録されやすいのですが、少なくとも政府が把握しているフォーマルな労働力率を比較しただけでも、アジアにおける女性の働き方は一様ではないということがわかるでしょう。調査の対象とした5地域に日本を加えた6地域は、女性の働き方のライフコースパターンという観点からは3つのタイプに分けられます。女性が一生働き続ける中国・タイ型、出産を機にいったん退職して子供が手を離れると再び働きだすいわゆるM字型雇用の韓国・日本型、そして子供が小さいうちは働き続け、子供がある程度大きくなると退職するシンガポール・台湾型です。それぞれの社会がこのようなパターンをとるに至った歴史的経緯や社会的背景もまた多様です。

この研究では子供と高齢者のケアに注目して、それぞれの社会においてどのような社会的ネットワークによってケアが担われているのかというパターンと、現状のジェンダーの在り方とが、どのような関係にあるのかを比較分析しました。一言でまとめると、育児期にも女性が働き続けている社会では、父親、親族、施設、家事労働者など多様なエージェントが育児に携わっており、豊かな育児ネットワークが存在するのに対して、育児期に女性が仕事を

やめる日本や韓国では育児の負担が母親ひとりの肩に重くのしかかっているとと言えます。わたしたちの研究成果は、『アジアの家族とジェンダー』（勁草書房、2007年）、『21世紀アジア家族』（明石書店、2006年）、*Asia's New Mothers* (Global Oriental, 2008) という3冊の本として出版されていますので、御関心がおありでしたらご覧いただけますと幸いです。

さて、このプロジェクトの後、残された課題がありました。それは二つの発見のもう一方、「共通の方向への変化のトレンド」です。現代アジアに共通する変化として、二つのトレンドが見出せました。ひとつは「主婦化 (housewifization)」、すなわち女性が家事・育児役割に専念するようになる傾向、もう一つは「再生産のグローバル化」です。

アジアの多くの社会では育児をサポートしてくれる豊かな社会的ネットワークが存在し、育児期にも女性が働き続けていると言いましたが、そうした国々においても、予想に反して主婦になる女性が出現し、主婦になる生き方へのあこがれが生まれているということにわたしたちは気がつきました。緊急で行ったインタビュー調査によると、現代アジアで女性が主婦になる原因には、失業や育児サポートの不足などの消極的要因と、子供の教育のためという積極的要因がありました。この問題についての初期の分析は、さきほど紹介した *Asia's New Mothers* に収めてあります。

一般に、ヨーロッパや北アメリカの多くの地域では、近代化にともない家事や育児に専門になる女性が増加する「主婦化」という現象が見られ、1970年代以降は女性の職業進出が進む「脱主婦化」現象が起きたと言われていますが、現在のアジアでのジェンダーの変化は、どちらの方向を向いているのでしょうか。「男は仕事、女は家庭」という性別分業に賛成するかどうかという意識調査の結果を見ると、アジアの多くの国は欧米圏と明らかに異なる傾向を示します（図2）。欧米圏で性別分業がオールドファッションになりつつありますが、アジアでは、現実の労働力率が高い社会ほど、反対に性別分業を肯定する意識が強い傾向があり、「主婦は素敵だ」という価値観が生まれているようです。他方、韓国のように欧米並みの意識を示す社会もあり、「脱主婦化」の傾向も同時に見られます。日本はちょうどその中間で揺れているようです。現在のアジアのジェンダーに関する意識は、実に複雑です。

もう一つ、いわゆる「再生産のグローバル化」もアジア各地で見られる現象です。家事労働者や介護労働者の国際移動が世界中でさかんになっていますが、いまやアジアでも外国人家事労働者を雇って家事や育児、高齢者の介護を任せる家族は少なくありません。特にシンガポールや台湾はそうした傾向が顕著です。労働者ばかりでなく、アジアの他の地域から妻を迎える国際結婚も増加しています。こうしたトレンドは、「国際移動の女性化」とも言われます。

ではこの二つのトレンドは互いにどのような関係にあるのでしょうか。「主婦化」はおもに中流階層の現象です。これに対し家事労働者や花嫁として国境を超えるのはそれより経済的に貧しい層だと言われます。これら二つの現象は互いに無関係なのでしょうか。

二つのトレンドを追究するために、わたしたちは新たな二つのプロジェクトを立てました。わたしが代表者を務めました「アジア諸社会における主婦化の比較研究 (A Comparative

Study of Housewifization in Asian Societies)」と、上野加代子さんが代表者の「アジアにおける女性の国際移動 (Transnational Migration of Women in Asia)」です。対象地域を広げて、インド、インドネシア、ベトナム、ミャンマーなども含めることにしました。今回のシンポジウムにはこれらのプロジェクトの成果もいくつか報告されます。

わたしたちはこのプロジェクトのフィールド調査のため、インドを訪問しましたが、家事の意味づけとやりかたが日本とはまったく異なることに新鮮な驚きを覚えました。神聖な料理と汚れた便所掃除とはまったく異質な行為であり、同じサーバントが両方をするなどということはありえません。また男性のサーバントも昔からたくさんおり、ジェンダーより社会集団による分業が行われていました。しかし変化も見られ、女性の就労支援のためにハウスメイドの訓練を行っている NGO では、調理、洗濯にトイレ掃除も行う女性たちを育成していました。「家事」というカテゴリーが成立し、その担い手は女性に限られるという傾向が生まれているようです。

マリア・ミースは、「主婦」という概念は、出産、育児、家事など生命の再生産にかかわる仕事を「労働」という概念から排除し、見えなくするために発明されたと言いました (Mies 1986)。「家事」は市場化されない、あるいはされても低価格でしか評価されない労働です。家事ペナルティ、ケアペナルティと呼ばれる現象です。そのような「家事」が女性というジェンダーに割り振られることが、近代社会におけるジェンダー不平等の基盤を形作っているのです。

「主婦」と「家事労働者」とは市場社会において自らの活動を正当に評価されない者として、共通性をもっています。「国際結婚」をする女性たちも、子孫をもうけるためや、家事や親の介護をするために迎えられる場合が少なくなく、同じ構図の中にいます。マーケットがグローバル化したのに対応して、市場化されない労働も、「主婦」や「家事労働者」を担い手として、グローバルに再配置されるに至っています。現代アジアに共通する二つのトレンドは、そうした再配置の一環なのでしょう。

では、今のアジアにおけるジェンダーの変化は、グローバル化した世界のどこでも起きている一般的な変化なのでしょう。そうではない、アジアの特徴があるとわたしは考えます。

その違いを説明するのに有効なのが、ソウル大学のチャン・キョンスプの提案した「圧縮された近代 (compressed modernity)」という枠組みです (Chang 1999)。アジアはヨーロッパやアメリカの社会が長い間かかって経験した変化を短期間に圧縮することにより、異なる経験をすることになるという理論です。

グローバル化が本格化したとき、ヨーロッパはすでに「近代家族以後」の時代に入っていました。福祉国家体制が確立し、ケアの社会化にも支えられて、「主婦化」のトレンドは「脱主婦化」へと反転していました。だからこそサスキア・サッセンは「妻のいない専門職家庭 (professional households without wife)」の家事を担うために外国人家事労働者が迎えられたと言ったのです (Sassen 2004)。ヨーロッパでのジェンダー平等の一定の達成の影にある、女性の間の階層化が問題にされました。

しかしアジアでは、現在、「近代家族」の確立と、グローバル化が重なり合って進行しています。ジェンダー平等と性別分業という対立する価値が拮抗する中で、外国人家事労働者や外国人妻は性別分業を固定する役割を果たしています。また福祉国家が未発達であるため、家族が外国人家事労働者を雇用して自主的解決を図ることで、家族が福祉の責任を抱え込む「家族主義 (familialism)」がむしろ強化されています。

アジアに共通の伝統文化があるとは言えません。しかし急速で圧縮された近代化が、福祉国家の成長に十分な時間を与えなかったという共通の条件が、アジアの共通性を今産み出し、強化しているのではないのでしょうか。国家に頼らず、性別分業を当然として、家族が助け合って生活を守る社会。その中で「アジア的ジェンダー」というものが、歴史上でいま初めて、創り出されているのかもしれない。

日本は、1970年代まで、経済成長でも福祉国家建設でもジェンダー役割でも、ヨーロッパや北アメリカを追いかけてきました。1980年代には好景気の中で、ジェンダー平等が公式イデオロギーとなりかかりました。明治維新以来、日本は「脱亜入欧」を掛け声に進んできたのです。しかしその後、バブル崩壊と「失われた十年」と呼ばれた時代を経て、進行したのは「脱欧入亜」ではなかったのかとわたしはひそかに考えています。せっかく整備した年金制度や医療保険制度の普遍性は危機に瀕し、非正規雇用の増加はジェンダー格差を拡大させ、それを批判する声も強くありません。性別分業を当然として、国家に頼らず、家族が助け合って生活を守るアジア型社会に、日本は向かっているのでしょうか。

このシンポジウムが開催されたちょうどその頃、トヨタのコマーシャルを見て、驚きました。「私たち、主婦で、ママで、女です」というキャッチコピーのもと、独身女性と見まがうような若やいだ服装の既婚女性たちが、車のある生活を楽しむ様子を肯定的に描いていたからです (図3)。日本のコマーシャルが「主婦」を憧れの対象として描いたのは、実に1960年代以来のことです (Ochiai 1997)。

このシンポジウムのテーマは、ただの学問的課題ではありません。わたしたちは明日どのような社会に生きるのかを見通し、できれば選択の糸口を見つけられるようにと願って開催したのが、このシンポジウムでした。

なお、このシンポジウムは京都大学グローバル COE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」との共催で行われました。COEでは続けて「第1回次世代グローバルワークショップ (Next-Generation Global Workshop)」を開催しましたが、そのワークショップで発表するために世界11地域の海外パートナー拠点の大学・研究機関から集まってくださった26人の次世代研究者と7人の先生方が、このシンポジウムにも参加してくださいました。世代と国境を超えて実に活発な議論がなされました。

本書は、近代的な女性役割の発祥の地オランダにおけるジェンダーの変容を出発点に、アジアにおける近代的ジェンダーの生成をひもとき、次に社会主義時代を経たベトナムや中国、および極度に「圧縮された近代」を経験しているインドにおけるジェンダーの現代的変容に目を向け、さらに国境を越えて移動する家事労働者や国際結婚の妻たち、そしてセックスワ

一カーの実態や心の葛藤に視野を広げていきます。そして最後にこうした現状への政策的対応にも触れて、まとめたいと思います。

本書の全体を通じて、アジアのジェンダーが、ヨーロッパ近代の影響を受けながら、しかしそれとは違う道筋を通して、いかに構築されてきたか、そしてこれからいかなる方向へ向かおうとしているのかに、思いを馳せてくださいましたら幸いです。

## 参考文献

Chang Kyung-Sup (1999)

“Compressed Modernity and Its Discontents: South Korean Society in Transition.” *Economy and Society* 28 (1): 30–55.

Mies, Maria (1986)

*Patriarchy and Accumulation on a World Scale*. London and New York: Zed Books.

Ochiai, Emiko (1997)

“Decent Housewives and Sensual White Women: Representations of Women in Postwar Japanese Magazines.” *Japan Review* 9, International Research Center for Japanese Studies, pp.151–169.

落合恵美子・上野加代子共編 (2006)

『21世紀アジア家族』明石書店

落合恵美子・宮坂靖子・山根真理共編 (2007)

『アジアの家族とジェンダー』勁草書房

Ochiai, Emiko and Barbara Molony, eds. (2008)

*Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*. Folkestone: Global Oriental.

Sassen, S. (2004)

“Global Cities and Survival Circuit.” In Ehrenreich, Barbara and Arlie Russell Hochschild, eds., *Global Woman*. New York: Owl Books.

図1 アジア6社会における年齢別女子労働力率

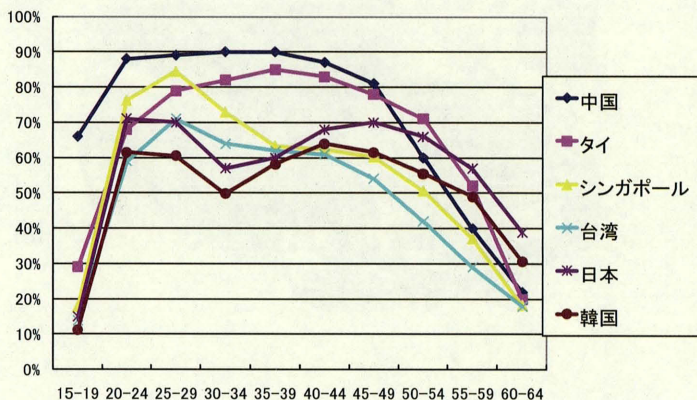


図2 「男性は外で働き、女性は家庭のことをするべきだ」という考えに対する女性の意見

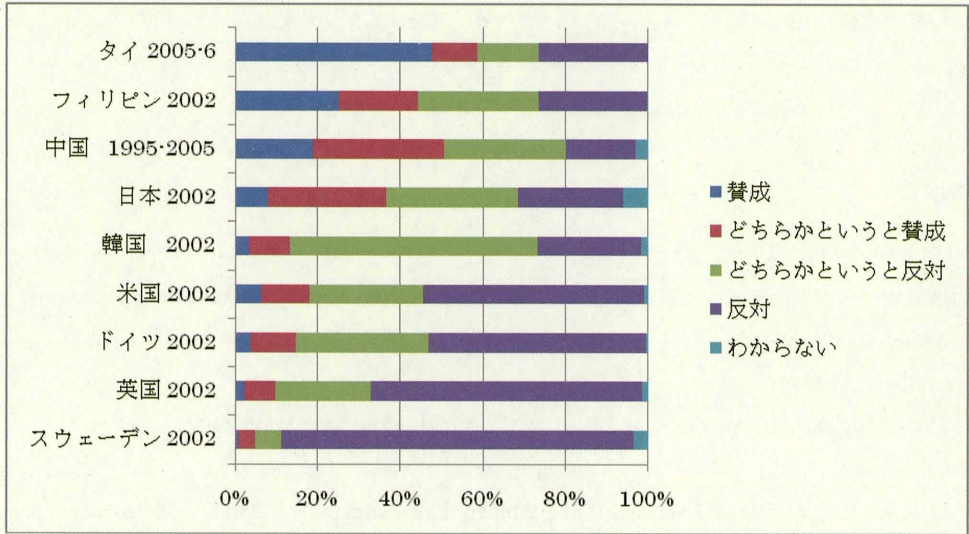


図3 トヨタ セツテの広告

